

光明

第九卷第九號

いさげなき兒は
手を引かれてたち
年老たる人は
杖にすがりて行く
これ力のすくなきなり
一切衆生自ら菩提の道に
進むべき力なし
されば本願の
他力によつて
煩惱の山をこえ
生死の巻をすきゆきて
涅槃のみやこに
入るべきなり

大眞 日本 光明團本部發行

大正十四年七月一日(第三種郵便物認可)
昭和二年九月十五日發行(毎月一回十五日發行)
大正十四年七月一日(第三種郵便物認可)
昭和二年九月十五日發行(毎月一回十五日發行)

光明 第九卷第九號 定價金拾錢

定價

一部金拾錢
一ヶ月一圓廿錢
(郵税共)

聖光

氣持のいい修養
雜誌で、如來に
救はれようさす
る青年男女に、
主管が合掌して
書くものです。

輝き

(聖光第二卷第九號より)

何たる輝きぞ！
其處に一ヶ條のおきてがない。
働いても働いても、まだ足りない
い。
足らなければ苦しいか。
不思議に心の底から嬉しさがこ
みあげる。
おゝ！何たる輝きぞ！
生きておるから輝く、
輝く光が世間をてらす。
其處には、自由があり、法悦が
ある。自然の天空

集歌

釣鐘草

一部金二十錢
(送料金二錢)

私達は歌ふ團體とも云へます。
うれしい時も悲しい時も歌ひます。
罪の子か暗い胸を抱いて
たゞ獨りで……
おゝそれは何ぞ云ふ恐ろしいめざめであ
つた……
歌い得ぬ心……泣き得ぬ心……笑ひ得ぬ
心……
おゝそれが救はれたのだつた。
今こそ歌へ、しつかりさ大地をふみしめ
て感じのいい歌十七首を集めた美しいも
のです。

合 掌

人間が一番眞面目になつた時、あなたが一番敬虔な世界にかへつた時、過去の聖者の心持の幾分でもわかつた時、あなたがほんとの救ひがわかつた時、あなたの上には合掌がある。

秋が來た！ 秋が來た！ 嚴肅に澄みきつた秋が來た！

襟を正さう。沈黙しやう。其處に一点の不眞面目が許されぬ。

黙して考へよ。黙して聞けよ。萬物はちよろくの悲愁を語る。

大地に跪いて如來に合掌せよ。

我が父は永劫の苦より救はれて、永遠の淨土にかへりたまふ。

秋更けて愁益々深し、親のある子よ！ 今の内に親の心にかへれ。

死後の熱涙の一滴を今日の親に捧げよ。合掌の世界に亡き父まします。

念佛せよ。其處に絶對の孝の世界がある。

父永眠す。

寂々として我心樂します。

語らんとすれど父いませず、

頼らんとすれど父いませず、

されど我が耳底に残る父いませし日の念佛のこえ

さびしくも我念佛す。

念佛の世界に父います。

涙の中にも微光あり、

父上は今寂光淨土に我をみそなはす。

聖人は念佛するのみぞ眞の孝なる所以を知らしめたまふ。

佛前を去り得ず、唯終日父をのみ憶ひつ、念佛す。

合掌の世界(一)

住岡狂風

金鼓の歌

「妙幢菩薩は親しく佛のみ許で、妙なるみ法を聞いて、歡におどり一心に思ひをめぐらして其居る處に還つたが、その夜、日輪のように光りかゞやく大いなる金の鼓を夢に見た。光の中には、量なき佛達、寶樹の下なる瑠璃の座に坐りて、百千の大衆にかこまれて法を説きたまひ、また一人の婆羅門は此金の鼓を撃つたが、その大いなる音のなかに、妙なる歌ありて、懺悔の法を説いた。妙幢菩薩は悉くこれを憶り持ちて、明る朝、世尊のみ許に詣で、金鼓の歌をうごうた。

(一) 妙なる鼓の聲、三千大千世界にわたり、惡道の罪も、人の世の苦も、悉くみな滅ぶ。

はてしなき生死の海に、善を積み、一切智を得たまふ佛は、よく諸人に覺の法を具えしめ、ことごとく功德の海に歸らしむ。

この妙なる鼓の音を聞く人は、常に佛に親み、あらゆる悪しき業を捨て、清きもろくの善を修めん。

眞心に願をこむる者は、この鼓の音を聞きて、求むる所を満たし、無間の地獄に焼かるゝ者も、此音を聞きて、苦を脱れん。

(二) 十方にいます佛よ、願はくば大悲をもつて、我を哀れ、我を憶はせ給え。衆生は歸依なく救なし。願くば大いなる歸依ならせたまね。

我さきに作りし罪を、み佛のみ前に懺悔し奉る。我はかつて佛を信せず。み親を敬はず、善を修めずして惡を造り、自らの種姓と財と位と若さを頼み放逸をふるまい、邪の念を起し、悪しく言い、悪しく行いぬ。

心は無明におほはれ、よからの友を友とし、或は樂しみ、或は憐み、つねに

食と嗔に傳られ、慳み嫉み諂ひあざむき、かくて諸の悪をなしぬ。

(三) 飲食と、衣服と、色欲とを貪りて、煩惱の火に焼かれ、三寶を敬う心を起さず、無智にして正しき法を誇り、衆の罪を造りぬ。我いま盡く懺悔し奉る百千劫にわたる罪も、よく懺悔すれば、暫くの中に消えぬ。

十方にのみすみ佛よ。願はくば我を觀はし、我を護り、大悲のみ心にて、この懺悔を受けたまわぬ。

(四) 劫を重ねし悪業にて、我は今苦しみ悩む。願はくば我を哀み、この苦を除き給わぬ。

未だ起らざる悪しき業は、起らざるやう防ぎ護らん。たとえば之にたごうとも、必ず覆み藏さざるべし。

我いま佛に歸依し奉る。海の如き徳をたゞね、金の山の世を照す如き、上なき佛を禮し奉る。願はくば哀みて、我を攝受め給え。

(五) 光明は日と遍く、諸の塵を離れ、光明は月と清く、人々のなやみを除く。苦しき生死の疾き流に、老と病の水に漂う。佛は光をのべて、堪得ぬ惱を竭し給う。

その時、世尊は深い禪定に入りたまひ、身より大いなる光を放ち、五濁の世を照し給はば、悪業を造る衆生は、この光の力によりてみな安樂を覺え、佛を見奉ることを得た。天帝釋は多くの天人達と共に此光を蒙りて世尊のみ許に訪で、掌を合せて『世尊よ。いかにして懺悔し罪を滅すでありますか』と問ひ奉つた。

世尊宣うよう『善き哉。善き子よ。もし衆生ありて、業によりて罪を造るならば、心を専らにし、掌を合せて佛を拜み、かように申すがよい』佛は眞の智慧、眞の御眼にて、あらゆる衆生の善悪の業を知りたまふ。私は始めも知らぬ昔より貪と嗔と痴ごのために縛られ、まだ佛、法、僧の三寶を知らなかつた時、悪い心をもつて佛の身より血を出し、正法を誇り、僧の和合を破り、聖者を殺し、父母を害い、かように自

ら五逆罪ごぎやくざいを造つくるのみならず、他人たにんをして造つくらしめた。又また横よこに善人ぜんじんを誘そしり、斗秤はかりめをあげむき、偽いつわりを真まこととなし、師長しちやうの教おしなに随したがはず、己のれに勝まさるものを嫉ねたみ、法ほうと財ざいとの施ほごしをおしんだ。佛ほとけは實じつの如ごとく是等これらの罪つみを知しり給たまう。私わたしはいま悉こくくく佛ほとけのみ前まへにつゝます述のべて懺悔ざんげし奉たてまる。

されば善よき子こよ。もし罪つみを造つくることがあるならば、暫しばらくもかくしてはならぬ。心に愧はじ未來みらいに必かならず、惡報あくほあることを信じ、大いなる恐おそれをもつて懺悔ざんげせよ。譬たとへえば頭にかしらついた火ひ、衣ころもに燃もゆる火ひを拂はらうように速すみかに懺悔ざんげせよ。……………』

(金光明最勝王經。新譯佛教聖典)

龍樹菩薩

『無量光明慧むりやうこうみやうえ、眞金山しんこんせんの如ごとし。我われいま身口意しんくういをもつて合掌がっせうし稽首けいしゆしたてまつる。』

(十住毘婆婆論)

天親菩薩

『若し善男子ぜんなんし善女人ぜんじょにんが(阿彌陀佛あみだぶつのお力ちからによつて)五念門ごねんもんを修おさめ、行成就ぎやうじやうじゆすればついに安樂國あんらくこくに生せいじて、かの阿彌陀佛あみだぶつを見たてまつることを得うる。五念門ごねんもんとはそもく何なにを云いふか。一いちには禮拜門らいはいもん、二ふたつには讚歎門さんたんもん、三みつには作願門さくがんもん、四しには觀察門くわんさつもん、五ごには廻向門くわうきやうもんである。如何いかに禮拜らいはいするの如ごとく云いへば、身業しんごうをもつて阿彌陀あみだ如來にらいの如ごとくりなき智慧ちへとお徳とくを禮拜らいはいし、かの國くにに生うまれさしていたくことが出來できるとの意いをなすことである。』

(淨土論)

善財童子

奈良縣磯城郡ならけんいそぎんぐんの文殊院もんじういんには、安阿彌やすあみが一刀三禮いちちゆうさんらいの技ぎをふるつて作つくつた、善財童子ぜんざいどうしの像すがたがあるさうであります。二三にさんの書物しよぶつの口繪くちえに出でてゐるのを見みました。童子どうしが合掌がっせう

ご、はなはだ、もつて難し、難中の難、これにすぎたるはなし」と申されました。合掌のない世界、云ひかへると、邪見傲慢の悪衆生が、如來の生命に生ざること、み法を聞いて信仰することは、困難もく、これにすぎたる難はないとの御言葉であります。私どもは知らず、識らず、高あがりして、合掌の世界を忘れます。い、何氣をつけて内観する時、私どもは永遠に頭の高い、邪見傲慢の悪衆生であります。唯如來のみ前にこの邪見な頭を下げさせて貰ふのであります。(つゞく)

御 禮 謹 告

父勤之亟儀 此度急病によつて死去致しましたに付いては、早速病中御見舞を頂き、更に葬儀に際して弔電、弔文、香華料等を賜り、各支部をはじめ多数御會葬下さいまして誠に有難く厚く御禮申し上げます。一々御禮も申述べます筈で御座いますが、手おちもあることだご存じます。畧儀ながら誌上で厚く御禮申し上げます。

昭和二年九月十日

住 岡 一 頓 首
外 住 岡 一 狂 風 同

父 逝 き ま し め (一) 住 岡 狂 風

あまりにも突然です

お父様 今日はどうくお父様と永遠のお別れになりました。
永い間、お父様御世話になりました。

外には雨がしよぼ降つてゐます、あたかも悲しい涙のやうに。

力一ばい看病しました。出来るだけの御手當も致しました。御醫者様も看護婦さんも、介抱人も、皆な不眠不休の活動を續けましたけれど、お父様は遂に人間の手のどかぬ世界にゆきました。

何といふあはたしい世界なのでせう。

本月一日の午前津田支部をたちます時には、私の身の上を氣遣つてくれる團員の方

々々『先生、朝鮮地方にお出でになりましたならば御体を御大事になさいます。氣候がちがひます。水がちがひます』と親切に云つて下さいます。私は八日出發で朝鮮滿州の旅に出かけることになつてゐたのです。

人生では全く豫想をゆるしませぬ。

九月一日の午後、思ひ出せば、お父様は例會の仕度も致しました。一日の夜は講演も聞きました。それに七日にはもう永遠に地上を去つて、久遠劫來待ちかねたもふ親様のみに歸つたのです。

あまりにも突然です。

時は流れます。もうお父様を送らねばなりません。

いのちでした

お父様

ありし日の數々が思出されて又しても涙の子となります。自動車は小雨の中を向西館にむかつて走ります。靈柩車には黒い喪服をつけた二人の看護婦さんが御供致します。

車は向西館につきました。昨年一月にはお父様と一緒に哲子をこゝに送りました。其時の深い悲しみに沈んだお父様を憶出します。然るに本年はお父様をこゝにおくらねばならぬとは。お父様は言ひました『早く死んだ者が、哲子の所に早く行くのだ』お父様が哲子のもとに早くゆきました。

お父様は私の生命でありました。そして又

私はお父様の生命であつたのです。

お父様にとつては私さへゐたらよかつたのです。私のゐない世界は、どんなよい所にしたつて駄目だつたのです。私が行く所だつたらお父様は何處でもいとほなかつたのです。私が居ればにぎやかであり、私があるければ寂しいのです。

『おい松浦さん。兄がゐないと寂しいのう……………』

老ひの眼には涙さね光る。

私はあなたのいのちであつたのです。そしてあなたは私のなくてならぬ生命だつたのです。

お父様は私に小言を一度も云ひませんでした。氣にいらなことがあつても私の顔を見ればなほるのです。

信仰に厚く、求道にいそがしかつたお父様は今や自然の淨土に召されて滅度をさらして頂きました。それについてちつとも心配はありません。若しお父様が淨土に召されてゐないならば、私は一切の信仰生活を疑ひます。或る僧侶の方は言ひました『この方が若し淨土往生してゐないならば、他には淨土に參いらせて貰ふものはない』とお父様、私は凡夫です。何と云つても心は暗いのです。寂しいのです。いよくたつた一人だと云ふ地上のさだめを味ひます。お父様がゐてくれたつて私の仕事にも經

財にもあまり關係はないのです。しかし言はなくても、語らなくても私の精神生活の根底を支えてゐてくれた者はお父様です。お父様の心はほればほるだけ光があり、念佛でありました。身も心も念佛でありました。お父様は決して、現實を生かすの、體驗だの、認識だのど六ヶ敷しい理窟を云ひませんでした。けれどもお父さんの信仰は素直に如來の全てを頂いて、此の世から未來へと救はれてゆく往生に根ざしつゝも、如來大悲の全体がお父様の今日の全体を支えてゐました。お父様の一切は如來の本願をおいてはなかつたのです。

私はお父様の上に久遠のみ親を拜みます。ですからお父様は私の光であり、力でありました。

肉のお父様はなくなりました。私は寂しい暗い心で一ぱいです。

しかし肉のあなたが亡した今、お父様は内面的にいよく私を招喚します。お父様は決して死んではゐないのです。佛性は常住であります。如來は永遠であります。念

佛の中にゆたかにお父さんにあひます。
 暗い／＼心を抱きます。たつた一人この心を抱いて悩めます。すると不思議にも其處には一点の光を見ます。微笑します。そしてその光は心一ぱいに擴ります。しかしそれは唯の一瞬です。私は再びもとの暗い心にかへります。

永遠の別れ

式ははじまります。

『奉請四方如來 入道場 散華樂……………』

と四奉請が唱へられます。導師の焼香につづいて、弔辭朗讀になりました。本部傳導員總代、各地支部長代表、東京本部員、廣島市團員總代等の弔辭が讀上げられた時す／＼りなきの聲か悲しくも皆を包んでしまひました。廣島市團員總代大山虎正氏は父に因縁の深い人であります。

弔詞

謹みて、和顔院釋祐應居士の靈前に捧げます。

諸行無常、それは聞いてゐました。けれどもあのなつかしい住岡先生の御尊父と大地に於ける永劫のお別れに、臨まなくてはならぬとは。佛の世界より外にあふことを許されぬことにならふとは、私等團員一同の等しく思ひ至らなかつた所であります。

静かにありし日のこと、も憶ひませば我等は迷へる身の悲しくも、野山に春は來れど、我等が心は秋の野と荒び、赫々たる太陽の光は沿びれど、虐げられし我

等は立つべき力を失ひ、のがるすべもなき凋落の秋に臨めど、吾等はそれにも徹し得ず、唯、惘々として病める胸を抱いて悩む時、

『我はこれ久遠劫來の業苦に悩む。されど傷つき痛み悩める魂の奥ふかくさぐる時、其處に洞徹したまふ如來の光明を仰ぎ、永遠に救ひたまふ大悲の勅命を聞く。』

と叫びつゝ導きたまふ恩師住岡先生を知るとき、さながら暗夜に光を得たるが如く、餓えたる者の恵まれたる如く、我等はこゝに如來の慈光に蘇るのであります。

かつて本部は南竹屋町にありました。

本部に先生を訪へば、無数の星の中に輝く月の如く、惱める人々の中にありて、救はれの安らかさご、み佛に生きりたまふ輝やかしさを以つて、淳々として吾等の胸に光を與へたまふ先生の傍かたわらにて白髪童顔、歡喜の念に双眼に涙して念佛せらる老翁のましませしを我等は知りました。これぞ惱める我等に恩師先生をお恵み下さいました御尊父であります。その御眼の輝しさよ。そのお顔の和らかさよ。お体全体に溢あふる、温かさよ。まことにこの尊父にしてこの先生あり、この先生にしてこの御尊父あり、ほんとうに先生に相應あはしい御尊父でありました。私どもはみ佛様によつて輝きたまふ温

顔に接した時、心の底より惹ひつけられざるを得なかつたのであります。偶々たまたま昨年こぞの春、本部は現在の八丁堀に移轉されて、寂しい我等のために月々例會をお開き下さる様になりましたから住岡先生によつて私等の上に光を惠まれると同時に、この御尊父にお會ひして魂の底から慰め育てられ、力と勇氣を得て荒波の中に歸つてゆくやうになつたのは我等にとつてどんなに大きな喜びでありましたでせう。

り病の人となられ、四十度と云ふお熱、刻々迫る病苦の中に、すでに意識を失ひたまひしと雖、その御口よりもれるものは唯稱名念佛のみ只讀經のみ、御苦惱

惱より救はれて、み佛の國へさしてお歸りなさつたのであります。

あ、慈父よ。私等の結ばれた時間はあまりに短う御座いました。

の中よりも時々語り出される御云の葉には、佛のみ救ひの有難さと、救はれねばならぬ我等であることをお示し下さいました。ともすればふざけんとする我等はお枕頭に侍りつ、苦惱の中よりの大説法には襟を正さざるを得ませんでした。かくて御病勢は刻々に進み、先生をはじめ本部の皆様みなの全力を擧げての御努力も、我等團員の願も遂に其効なく七日午後六時十分さなきだに、人の心の沈みゆく秋の夜の帳はばりの迫らんとするころ、永劫の苦

けれどもこの間に結ばれた縁えんは地上を超えて永遠の浄土まで通る絶對なものであります。惱みの大地を離れて永遠の浄土にかへりました慈父様よ、み名を呼べど答へまさぬ。君は浄土に我等は穢土に、その隔りはあまりにも大きく御座います。されど地上にましませし日、残したまひしみ教によつて、我等も亦絶對他力の願船に運ばれて、慈父のみもどにかへりゆくことの出来ませす我々です。お待ち下さいませ。

今や還相廻向に生きます慈父よ。永遠

昭和二年九月九日

に我等を導き護りたまへよ。地上における最後の別れに悲しき思出の一端をのべて弔辭とします。

廣島市光明團々員總代

合 掌

大 山 虎 正

泣きました。皆泣きました。全てがお父様のお葬式にふさはしかつたのです。やがて導師龍永悟由師によつて正信偈はあげられて焼香は型の如くすみ、最後に弔歌は傳導員一同によつて歌はれました。悲しい〜調は腸の中にしみつきます。

『み佛に抱かれて

なつかしき面影の

み佛に抱かれて

み救ひを身にかけて

み佛に抱かれて

つきせざる樂しみに

父逝きぬ西の國
消へはてし悲しさよ

父逝きぬ玉の家
示しますかここさよ

父逝きぬ花の里
笑みませる尊さよ』

お父様かくて私たちは永遠にお送りして本部にかへりました。(つづく)

正 信 偈 の 話 (三十七)

第十一章 源空上人

一、悲 智 二 徳

(本文) 本師源空明佛敎 憐愍善惡凡夫人

(讀方) 本師源空佛敎に明かにして、善惡の凡夫人を憐愍せしむ。

(字 義)

『本師』 本宗の祖師と云ふこと。

『凡夫』 平凡な人、即ち智慧淺く、煩惱多くして佛道修行に堪えざる者。

『憐愍』 アハレムこと。

智 德

この二句は源空上人の智慧と慈悲とを讃嘆せられたものであります。
 上人は一切藏經を徧覽せらるゝこと五遍、廣く諸宗の學問を究め、佛敎の奥義を明らかにせられ、當時の人々は上人を稱して智慧第一の法然房と呼んで居たのであります。是は智徳であります。

悲 徳

次に善惡の凡夫人を憐愍せしむ、とあります。
 こゝに合点のゆかぬことは、善人も悪人も共に感みたまふたと云ふことであります。私達が犬を見る時、犬の中にも賢い犬もありません。馬鹿な犬もありません。然し

これを人間の立場から見ると、犬は矢張り感れな犬でしかありません。
 善人も悪人も、智者も愚者も、老人も子供も、男も女も、如來の前には一切無差別であります。

皆平等に人間であり、凡夫であり、悪人であります。
 自己を悪人ではないと思つてゐる人は、一度も自己について深く考へたことのない人であつて、自己を知らず如來を知らず、此の土の厭ふべきことを知らず淨土の願ふべきことを知らず、随つて人間以上の世界に生れることの出来ない人だと思ひます。

さめざる凡夫

然るに、蓮如上人は『たれのともがらも、われはわろきとおもふものひとりとしてあるべからず、これしかしながら聖人の御罰をかうぶりたるすがたなり。これによりて一人づゝも心中をひるがへさずば、ながき世泥梨にふかくしづむべきなり。こ

れといふも、なにごとぞなれば、眞實に佛法のそこを知らざるが故なり』
と仰せられました。

私達は自己を知らないために悪人なることを知らず、佛法の根本を知らないため悪人を救ふと云ふ彌陀の本願を信じないのであります。

源空上人は、新毒の善、表面だけの善を恃みて高慢になり、悪人をこそ其儘救ひたまふ彌陀の本願を身にひきうけて信ずることなき善人も、三毒五欲の煩惱の生活をしながらすこしも恥することなき悪人も共に惑に思召しねことでありませう。

こうした善惡の凡夫は心をひるがへして彌陀の本願を深く信じて、念佛するより他に救はれる道のないことをお示しになりました。

埋 草

善い事をして、自慢が出たら善事が消えて、惡感がのこる。

懺悔してゐる者には、惡感を超えて、其の上光が見ゆる。

眞の懺悔は、如來を信する世界においてのみあり得る。

母を亡くして (二)

臺 愚 狂

精進へと更に最近に御佛様の御恩を喜ばれ、地上で爲すべき事をみんな果して御佛様の御國への旅立ちなのだ。

御浄土へ!!

亡き母を想ふ夢と現實との境をさ迷つてゐる間に何時しか時は流れて早や四十九日に相當する七月二十九日となつた。

老そして健康の破壊? 生命の危機?

母還ります臨終に兄妹四人で御稱名の中に送つた情景を追想する。母の地上の

其れが何でせう。そう思ふ時、悲涙の中に眞實のおほみ親の御慰藉に預らせて頂く事は何たる幸福!!

最後、否、死、そう思ふ時、心の底から寂しく全く悲觀的になつた。

自分の淺間しい貧しい心に、いとも豊

然し母上は、姑に仕へ、夫に仕へ、私共を育て上げ奮闘から奮闘へ、精進から

かに恵まれた不可思議光に歸命し、讚嘆し、稱名しゆく私の方強さを思ひ出すと法藏菩薩の弘誓が、私の天地に充ち満ち

してゐることを感ずる……………

母上は法悦の世界、法の淨土へ、親様の御國へ、永劫の世界へ、永遠の故郷へ久遠の親里へ旅立ち還られたものだと考へて見る……………

けれど、地上に生き残つた私は日に増し愛別離苦に逢ふた堪えられない寂漠の泪が止め難く頬を傳はる。人の心の眞の姿は餘りに寂しい。

悲しい貧しいもの。地上よりの別離、地上より去る人！

私達は皆死の時が訪れる。貴い人も、

賤しい人も、富者も、貧者も、地上に生ける者は皆消えてゆく。散り／＼に分れ分れになる。

切ないけれども燭生、獨死、獨去、獨來、誰一人も道連れは成らぬ恐しい旅人の私共なんです。無限の曠野にすゝり泣く久遠の泥凡夫。

大きな力であつた母上を亡くして何もなくなつた素裸の自然兒!! 血路を切開いて進まねばならぬ。宿業に引かれて流れる生死の苦海、この恐ろしい業報の世界に生きながら業報にさへられずして無

量壽佛の威神功德不可思議（なる事）を讃嘆さして頂くことは、何といふ弘誓の強縁でせう！

宿業を抱きしめて、この宇宙の實相に目覺め如來様の本願に躍動させられる世界は何と懐しい神秘的な莊嚴なのでせう。

そこには善、惡、美、醜、老、若、男女、理想、現實、それらの相對的存在を一如の熔鑪爐にとかされて絶對の彌陀本願の慈懷の無限世界が展開されてゐる。

この世界こそ萬人の辿りつかねばならぬ靈の故郷、久遠の親里である。

私は母を追想し母戀しのたまらない胸を抱いて泣いて／＼そのごん底に母上と彌陀佛との呼聲の二つが一つになつて聞えます。

餘りの淋しさに母戀しの情の切ない爲あらゆる人がなづかしく且つ濫い慈愛を求めます。でも地上にはこの淋しさを充すだけの愛は恵まれません。もう唯、念佛して久遠の親里に還りませし如來としての母上の無聲の慈音を聞くより外、道はありません。この唯念佛に就いて、口傳鈔の『まづ凡夫はことにおいてつたな

くおろかなり。その奸詐^{かんざ}なる性の實なるをうづみて、賢善^{けんぜん}なるよしをもつてなすはみな不實^{ふじつ}假^け虚^こなり。……愛別離^{あいべつり}苦^くに逢ふて、愚かにつたなげにして、なげき悲しまんこと他力往生の機に相應たるべし。うちまかせて凡夫のありさまにかはりあるべからず。……なか／＼おろかに、つたなげなる煩惱成就の凡夫にてたゞかりにかざるところなきはがたにてはんべらんこそ、淨土眞宗の本願の正機たるべけれどまさしくおほせありき。……

たとひ妄愛の迷心深重なりといふども

もとよりかゝる機をむねと攝持せんといでたちてこれがためにまうけられたる本願なるによりて至極大罪の五逆^{ごぎやく}謗^{ぼう}法^{ぽう}等の無間の業因をおもしとましまさざればまして愛別離^{あいべつり}苦^くにたへざる悲歎^{ひたん}にさへらるべからず。淨土往生の信心成就したらんにつけても、このたびか輪廻生死のはてなれば、なげきもかなしみもとも深かるべきについて、あとまくらにならびて悲歎^{ひたん}嗚咽^{おんげつ}し、ひだりにみぎに群集して戀慕^{こぼ}涕泣^{ていせき}すとも更にそれによるべからず』との聖語が誠に有難く涙します。

御名はたつた六字！ しかしそれには無限大の人生の悩みが解決される力が籠つてゐる。不可思議です。この佛法不思議は保證付の信心からは出て來ません。否、信心には保證はありません。

食事毎に頂く茶碗の飯粒の數も知らない。何一つとして精確にわかつたものなく、いゝ加減に知つたことも忘れ、持つたものはやがて失ひ、一日だつて同じ事をしてはゐないのが私共凡人です。天地の間には保證や豫想の立たないこと許り行はれてゐます。

嚴密な意味で人間は何をも保證出來ません。花が咲くのも實がなるのもちつども人間の保證ではありません。みんな不思議です。

私がこうしてペンを走らせてゐるのも井端で洗面するのも人と人と出會ふことも寢床の中で地球の引力にまかせてころがるのも

御飯一杯いたゞくのも人が生れ、人が死ぬのもみんな不思議です。大奇蹟です。

天と地とは織こまれ、

人には天地が澄み渡つてゐるんです。

私は母が病床中から引つゞき葬儀の當日に至る間、近所の方々が農繁期で御多忙に拘らず、毎夜のように御疲れも御いなく御越し下すつて母を看たり、大へんな御苦勞下さる事が不思議で不思議でなりませんでした。

そしていと小さい自己の姿に氣づかれ黙して念佛さして貰ひ、ほんとに御蔭の中に生かされてある身の上を感謝さして頂きました。これ眞實に他力の御恩で

す。

人は淋しい苦しいたつた一人なる事を氣付けば氣付く程、他から多くの力が加はりつゝある事を感得出来ます。この御恩に目覺め、このまんまが絶對者の恩恵に依つて生かされてある事に氣付かせて頂く時、その人は救はれて平安な生活に這入れます。

多くの人は、それに脊を向けて御蔭を失つてゐるのです。私は人生の苦惱の底に、この御恩を感得して凡てに對して御佛様の御蔭を謝し、合掌の生活をたよら

せて頂くことこそ、眞に永遠に生きる大道であることを痛感します。これは勿論御佛様の慈恩は總括されたものでなくてはなりません。

釋尊が『地上の親の恩は深くして、たとひ百年の生あつて母を右の肩にのせ、父を左の肩にのせて所々を見物さしても或は香水をもつて全身をあらひ揉んでもその恩を報ひるに足らぬが、親の不信をさとし、眞實の信心に御導き申すならばそれがその恩に報ゆるに足るべし』との意の事を仰せられてあります。

私は不思議な因縁で住岡先生が恵まれて、逝去しました母上が御佛様に救はれて法悦の中に一家團圓の幸福を恵まれたことを思ひ、絶對の御慈悲を限りなく有難く感じます。

母は今地上の何處をさがしても影さへ見つかりません。愚痴の心のうごく時は何故生きてゐて下さらないのか？ なせ再び見られないことになつたのか知らん？ なんて思ふこともありますが、靜かに内省さして頂いて見ますと、母を殺したのは私の罪業の仕業でしかない氣がし

ます。

『約束事です。壽命だから仕方がありませんよ』と云はれたのでは、私の心は落付きません。罪深い私は、その罪を懺悔し乍ら慕はずにゐられない願求に、うごかされて如來と一体にてまします母上の前に合掌さして頂く時、心が甦ります。母を亡くして母戀しの深情に即して久遠の親里の慕はしさを泌々味はせて頂きます。

私は灰葬の翌日直ちに上京したりいたしましたので漸く近頃になつて、深まり

ゆく淋しさの中に唯念佛さして頂きます
悲哀に服従する心になれば、それを忍
従する神秘な力と慰めが惠まれます。
地上の兩親を失つて暗夜の様な寂しさ
の中に御蔭で却つて、その寂漠を喜び、
悲哀を絶對美なる六字の歌に歌はして頂
いて居ります。

南無阿彌陀佛 (終)

「母の亡くして」(一)は、昭和二年七月十五日發行(第九卷第七號)に掲載いたしましたので第九卷第八號に掲載するはずでしたが、都合上本號へ掲載いたしました。

消 息

□四日より八日迄。夏季講習會。榎町明國寺。會員五十名有意義な面白い會。□賀茂郡東高屋青年團九日夜より十二日迄。はじめての所、河内支部から手がのびたのである。□本部お盆の講演會十四日より三日間例により盛會。□備後市村處女會大會十八日一眞實に生きる力」と題して語る。其夜市村支部主催講演會。□佐伯郡大君、二十日から二十三日迄。眞劍なること例の通り、二十三日夜は大原小學校にて昭友會主催大盛會。大君よりも五十名出席。□吉島濟世軍分隊二十四日から三晩。聽衆の大部分は團員。□津田支部大會二十八日より三十一日迄。濟世軍波多氏と一緒に講演す。大盛會。□一日より本部例會。□二日主管學父發病七日午後六時十分大往生。九日午後二時向西館にて葬儀。各支部及市内團員同行の會葬。此間本部戦場の如し。

オコトハリ

本部に不幸があつた爲め、二日より十日迄は全く夜書の區別もなく、數十人の人ごみの中で、印刷部の方も臨時休業の有様になつた爲めに、大變不完全な雑誌を皆様にお送りするやうですみません。悪しからず御許し下さい。

本誌定價

一部 金 十 錢 (郵税共)
一ヶ年 金 壹 圓 貳 拾 錢 (郵税共)
◎誌代は前金にて可成振替で御送金のこと
◎一事が萬事です。半年も一年も前金切れのまゝである人が十人中五人あります。
◎机の上を見ただけで其人の一生がわかる修養は小さいことからです。
◎前金切れの知らせがあつた時、すぐ半年以上を御出し下さい。

昭和二年九月十日印刷
昭和二年九月十五日發行

編輯兼發行人 花岡 靜人
印刷所 花山 健二
印刷所 光明團印刷部

廣島市八丁堀二十六番地
發行所 光明團本部
振替貯金口座下關貳金〇八番